

# スポーツを通じたナショナリズム研究の分析視角の検討

## A Study of Research Perspectives on Nationalism through Sports

キーワード：スポーツ・ナショナリズム、平凡なナショナリズム、ネーションの「実体化」  
Keywords: Sport Nationalism (Sportive Nationalism, Sporting Nationalism),  
Banal Nationalism, “Substantialization” of Nation

笹生 心太

SASAO Shinta

### Abstract

We often feel a sense of nationalism when we watch international sports. In this way, sports, as a research field, have great potential to clarify what nationalism is or how feelings of nationalism are aroused. However, research on the relationship between sports and nationalism in Japan has not progressed successfully. This paper discusses the previous research perspectives on sports and nationalism in Japan, and shows how we can further develop this research topic.

### 1. 問題関心

グローバル化が進んだ現在の社会では、日常生活の中で、自分が特定の国民（ネーション）の一員であるという感覚（ナショナリズム）はあまり意識化されない。だが、スポーツの国際試合の際には、そうした感覚が強く意識される。オリンピック・パラリンピックやサッカーワールドカップ（以下「W杯」）に対する世界中の人々の熱狂を見るまでもなく、スポーツはナショナリズムを喚起しやすい。スポーツは、ナショナリズムと密接に結び付いた文化であると同時に、ナショナリズムという現象を解き明かすための格好の題材と考えられる。

ところが、こうした題材としての可能性の豊潤さに比して、スポーツとナショナリズムの結びつきに関する理論的な研究は、意外なほどに進んでいない。スポーツ社会学領域におけるナショナリズム研究の第

一人者と言えるBairner [2015: 378] は、スポーツとナショナリズムに関する国際的な研究蓄積をまとめたレビュー論文の中で、スポーツ社会学領域のこれまでの研究は、メインストリームの社会学領域のナショナリズム研究の成果をスポーツに応用することには熱心だったが、スポーツの事例からナショナリズムという現象を問い直す姿勢に欠けてきたと指摘した。

もちろん、スポーツ社会学領域の諸研究は、スポーツとナショナリズムの結びつきに関して様々な事例を発見してきたし、またその結びつきの問題点などについて重要な指摘を行ってきた。日本に関連する研究状況を概観すると、オリンピックやW杯などの国際スポーツイベントに見られるナショナリズムに関する研究 [黄, 2003; 石坂・小澤, 2015 など]、明治期の運動会とネーションの創造に関する研究 [吉見, 1999a など]、昭和期のスポーツとネーションの再構築に関する研究 [坂上, 1988; 権, 2006; 坂上, 2015; 佐々

木, 2015など]、日本国内におけるエスニック・マイノリティとスポーツに関する研究[巴, 2012; 植田・松村, 2013; 清, 2016など]など、非常に広範囲にわたる<sup>注1)</sup>。しかしこれらの諸研究は、それぞれが個別にスポーツとナショナリズムの結びつきに論究する場合がほとんどで、スポーツとナショナリズムの結びつきのメカニズムやその類型などについて、理論的に進展させていくような志向性を有したものは多くない。そのため、スポーツという文化領域から、メインストリームの社会学領域のナショナリズム理論を更新するような志向性を持ってこなかったと言える。

以上のような研究状況を踏まえ、本研究では、スポーツを通じてナショナリズムをどのように問うことができるのかを、仮説的に提示することを目的とする。具体的には、まず、ネーションやナショナリズムに関する社会学的研究の成果を踏まえ、ナショナリズムという非常に曖昧な現象について、その多様な側面を試案的に分類する。次に、その分類を踏まえ、既存のスポーツとナショナリズムに関する諸研究が、いかなる意味でナショナリズムという語を用いてきたのかを整理する。そして最後に、先行研究のナショナリズム理解の特徴を踏まえた上で、スポーツという文化領域からナショナリズム研究を進展させるためには、どのような側面に着目すべきなのかを、仮説的に提示する。

なお、第2の作業について、スポーツとナショナリズムの結びつきは世界中に見られるものであるが、それらに関する研究すべてをレビューすることは筆者の力量を超えている。本研究では、あくまで日本に関連する事例の研究のレビューにとどめ、他国における事例の検討は別稿の課題としたい。また、本研究にて取り扱う研究は、スポーツとナショナリズムについて、特定の事例をもって実証的に論じる研究である。スポーツとナショナリズムの結びつきについて理論的に論じる研究も見られるが[吉見, 1999b; 有元, 2012; 内海, 2012; 土佐, 2015など]、これらは研究上の参考にはしたものの、分析対象としては除外した<sup>注2)</sup>。

## 2. ナショナリズムの多様な側面

### 2.1 ネーション

ナショナリズム概念について検討する前に、その前提となるネーション概念について整理したい。この概念は非常に複雑であり、論者によってその意味するところが大きく異なる。ネーションという語は、日本語では「国民」「民族」「国家」などと訳されることが多いが、これらはそれぞれ意味合いに大きな隔たりがある。ネーションとは何なのかという問題について、英語のnationに限らず、フランス語やドイツ語、ロシア語などのこれに相当する単語の意味合いまで含めて整理したのが、塩川[2008]である。塩川は、「エスニシティ」、「民族」、「国民」という日本語の概念を検討した上で、ネーションを定義する。結論を先取りすれば、ネーションとは、「民族」と「国民」の両者を意味するような語である。

「エスニシティ」とは、「血縁ないし祖先・言語・宗教・生活習慣・文化などに関して、『われわれは〇〇を共有する仲間だ』という意識—逆にいえば、『われわれでない』彼ら』はそうした共通性の外にある『他者』だ」という意識—が広まっている集団をさす[塩川, 2008: 3-4]ものとされる。ここで重要なのは、「エスニシティ」とは人間集団へのこだわりを指すということで、その核として血縁や文化、言語などが用いられるということである。そして、その「エスニシティ」が、自らの国家ないしそれに準じる政治的単位を持つべきという意識が広まったとき、それは「民族」と呼ばれるようになる。この「エスニシティ」と「民族」の差は、政治的制度や集団としての自覚度によるもので、その境界は曖昧である。

一方、「エスニシティ」の対極にあるのが「国民」である。「国民」とは、「ある国家の正統な構成員の総体」[塩川, 2008: 7]を意味する。この「国民」という概念には、必ずしもエスニックな同質性は必要とされず、法制度的な正当性が必要とされるのみである。

そして、同研究によるネーション理解とは、「民族」と「国民」の両者を含むものである。ネーションは、「エスニシティ」とは区別されるが、「民族」という意味合いが強い場合もあれば、「国民」という意味合い

が強い場合もある。例えばアメリカにおけるnationとは、ほぼ完全に「国民」の意味となる(nationalと表現した際には「民族的」ではなく「全国的」という意味になる)。一方でドイツ語のnationやnationalitätにはエスニックな意味合いが反映されており、「国民」を意味するときにはstaatsangehörigkeitという別の単語が用いられる。また、この区別も言語ごとに一律のものではなく、例えばアメリカと同じ英語圏のイギリスでは、nationと表現した際にはスコットランドやウェールズなどの文化的同質性の高い集団を意味し、アメリカの場合に比べて相対的に「民族」的な意味合いが強い。このように、ネーションという語の持つ意味合いは多様であり、またそれは厳密に区分できるものではない。

以上、塩川[2008]の区分に従って、ネーション概念について簡単に整理してきた。こうした区分には、細かい点でいくつかの異論はあるものの、概ね他の日本語による研究によっても支持されていると言っていよい[植村, 2014など]。

このようなネーション理解に立ったとき、本研究が問題とするナショナリズムという語は、「国民主義」と訳せる場合と、「民族主義」と訳せる場合がある。前者の訳し方をした場合には、同じ国家の正当なメンバーへの肯定的な感情を意味する。一方、後者の訳し方をした場合には、血統や文化などを共有する人々に対する肯定的な感情を意味する。そして、塩川[2008]や佐藤[2009]など、多くの論者が「国家」はネーション概念に含まれないとしているが<sup>注3)</sup>、日本語ではナショナリズムを「国家主義」と訳す場合もある。この場合には、人間集団に対する共感というよりも、国家という制度や装置に対する共感と理解することができるだろう。

## 2.2 ナショナリズム

以上のように、ナショナリズムの概念は、そもそものネーションという概念の多様性に対応して、様々な理解が可能である。さらに、こうしたネーション概念に由来する多様性に加えて、ナショナリズム概念には、その着目する場面に応じても様々な側面を有している。

ナショナリズムは、「第一義的には、政治的な単位と民族的な単位とが一致しなければならないと主張する一つの政治的原理」[Gellner, 1983: 訳書1]、「自分たちは現実の、あるいは潜在的な『ネーション』を構成していると思っている成員が存在する集団において、その自治と統一とアイデンティティを確立し維持することをめざすイデオロギー的運動」[Smith, 2010: 訳書28]などと定義づけられてきたが、決定的な定義は存在しない。その捉えどころのなさは、研究者たちの関心によって、この現象のどの側面に光を当ててのかがそれぞれだからである。つまり、「確かにB. アンダーソン、C. ティリー、E. ゲルナー、J. プルイリー、A. スミスなどの研究者によって優れたナショナリズムの説明方法や分析枠組みは提供されているものの、それが対象とする『ナショナリズム』の解釈およびアプローチはそれぞれに異なり、しかも枠組み相互の関係もあきらかではない」[佐藤, 2000: 37]ことが、その主たる要因である。このように、これまでの研究は、ナショナリズムの有するそれぞれに異なった側面に着目してきたため、すべての側面を包括するような定義を作ることが困難なのである。

一般的にナショナリズムというと、第二次世界大戦後に各地で起こった、民族的なネーションが新たな国家を創ろうとするような場面が想定されやすい。ナショナリズムの定義に関する1つの準拠点としての地位を確立している、上述のGellner[1983]による定義は、まさにこうしたネーションを誕生させようとする場面に注目したものと言える<sup>注4)</sup>。ところがナショナリズムという語は、ある集団がネーションとして新たに立ち上がろうとする場合にも、既存のネーションの中で人々が自らのアイデンティティを確認する場合にも用いられる。吉野[1997]は前者を「創造型ナショナリズム」、後者を「再構築型ナショナリズム」と区分した。このように、ネーションの創造に焦点が当たる場合と、ネーションの再構築に焦点が当たる場合とがある点は、ナショナリズムという現象の抱える多様な側面の1つである。また、吉野[1997:67]は、「従来のナショナリズム研究では、対象が創造型ナショナリズムに限定されてきたため、既にネーションとして確立している先発諸国のナショナル・アイデンティティ展開が

十分に研究されていなかった」と、再構築型ナショナリズム研究の必要性を訴える。

この他にも、ネーションを原初的なものと捉えるのか近代的なものとして捉えるのか、ナショナリズムを激しい「運動」と捉えるのかより穏当な「思想」と捉えるのか、ナショナル・アイデンティティを人々の心の中にあると捉えるのか集合的な諸制度の中にあると捉えるのかなど、ネーションやナショナリズムの解釈について、様々な論点が存在する。しかし本研究では、ひとまずこれらの議論は捨象し、ナショナリズムが求められる場面として、ネーションの創造の場面とネーションの再構築の場面とがあることのみを確認しておく。

### 2.3 ナショナリズムの多様な側面

以上、非常に簡単ではあるが、ネーションおよびナショナリズムという概念について、その多様な側面を概観してきた。以下では、それを整理し、ナショナリズムという現象を試案的に分類する。

まず、すでにネーション概念の検討で見たように、どういった対象に対して共感や肯定的な感情を持つかによって、ナショナリズムは(1) 国民主義、(2) 民族主義、(3) 国家主義に分けることができる。(1)は、血統などとは無関係に、同じ国家の正当なメンバーに対する愛着や肯定的な感情である。次に(2)は、法的な正当性よりも、血統や文化などのエスニックな要素を共有する仲間に対する愛着や肯定的な感情である。そして(3)は人間集団としてのネーションというよりも、統治機構としての国家への愛着や肯定的な感情である。そしてナショナリズムには、それが要請される場面として、ネーションの創造の場面と再構築の場面とがある。

以下では、これらの分類を参考として、スポーツとナショナリズムに関する先行研究の視角を整理していく。ただしこの分類は、あくまで試案的なものに過ぎない。多くの研究が指摘するように、ナショナリズムという現象はきわめて複雑で、クリアに分類することは不可能である。ここで試案として示した類型は、以下にて検討するスポーツとナショナリズムについて論じる先行研究がどのような意味合いでナショナリズムを理解してきたのかを整理するための、暫定的な「補

助線」に過ぎない。

## 3. スポーツとナショナリズムに関する研究の分類とその視角

### 3.1 ネーション理解による分類

まず、上記2.1で検討した、ネーションという概念をどのようなものとして捉えているのかによって分類する。

(1) 国民主義としてナショナリズムを理解する研究としては、スポーツそのものや、それに関した商品などが、全国的な広がりを持った集団に働きかけるような意図を告発する研究を挙げることができる。その基本的認識は、「[冷戦期以降の:引用者注]スポーツを通じたナショナリズムは、国家の政治的レベルで生産されるのではなく、商品を売るための企業によってそのブランディングのために用いられるのである」[有元, 2012:45]といったものである。こうした研究群の代表的なものは、浜田[2016]である。同研究は、1930年代に行われたオリンピックを報じる日本のメディアに着目し、大会の報道や関連商品のコマーシャルの中に見られるナショナルな傾向、すなわち日本を中心として大会を論じる傾向、日の丸や君が代に関する報道、日本人選手の活躍を報じる際に戦争のメタファーを用いる表現などに着目した。その結果、それらの報道やコマーシャルは、確かに人々のナショナリズムを煽るものではあったが、ナショナリズムを煽ること自体が目的だったわけではなく、商業的熱意に結び付けられていたことを明らかにした。すなわち、当時の報道やコマーシャルは、国民に対して、オリンピックは「自分たち」にとっての大会であると訴求し、大会を盛り上げたり、商品の購買意欲を高めるためにナショナリズムを動員したのである。このように、同研究におけるナショナリズムとは、オリンピックというメディアイベントに娯楽性を付与するための手段として位置付けられている。ここで前提されるナショナリズムとは、同じ日本に住む国民全体で日本代表選手を応援するという意味合いであり、エスニックな同質性は問題とされていない。

次に、(2) 民族主義としてナショナリズムを理解す

る研究として、日本人や在日外国人たちのアイデンティティとスポーツを結びつけて理解する研究群を挙げることができる。これらの研究は、民族的スポーツなどが「民族の統合や文化的アイデンティティを創造するために運動や政策として発現する場合もある」[坂上, 2015:76]といった基本的認識の上に成り立っている。こうした研究群には、日本に住む外国人や移民に着目し、在日朝鮮人・韓国人が日本のサッカーのシステムの中で「正当」なメンバーとして認められないことの葛藤を示した研究[清, 2016]や、在日中国人にとってのサッカークラブが同族意識を高める場として機能していることを論じた研究[巴, 2012]、生活が不安定な在日ブラジル人たちにとってフットサル場が子育ての場やブラジル文化の学習の場として機能していることを示した研究[植田・松村, 2013]などがある。これらの研究は、ネーションやエスニシティに内在するとされる特質をスポーツに付託する、あるいはエスニック集団の連帯の象徴としてスポーツを用いるという意味合いでナショナリズムの語を用いている。

さらに、同じく(2) 民族主義としてナショナリズムを理解するが、そこに排外主義という意味合いを付与して理解する研究群も存在する。清[2016]は、レイシズムとサッカーに関する事例として、2002年に行われたW杯日韓大会以降台頭したとされる「ぶちナショナリズム」<sup>注5)</sup>のその後の展開、日本と韓国のサッカーの試合における政治的主張を掲げる横断幕や国旗の問題、日本のサッカーリーグのサポーターによる排外主義的主張や行為など、様々なトピックを扱っている。また有元[2016]は、W杯日韓大会をきっかけとして韓国への憎悪に目覚めた日本人サポーターに着目し、彼が排外主義に目覚めていったライフヒストリーを分析している。

そして、(3) 国家主義としてナショナリズムと捉える研究としては、国際スポーツイベントを通じて人々が国家体制に動員されているという見方をする研究群が挙げられる。それらは、「[1936年のオリンピックベルリン大会の際には:引用者注]オリンピックは、スポーツの政治的利用によるナショナリズム高揚のための手段や演出装置として、巧妙にも効果的

な政治的空間となった」[小澤, 2015:6]といった基本的な認識のもとで、スポーツとナショナリズムの関係性を論じる。具体的な事例としては、オリンピックやW杯といった国際スポーツイベントに着目するもの[黄, 2003;石坂・小澤, 2015など]がもっとも多いが、その他にも多様な事例が指摘されている。例えば吉見[1999a]は、明治期に森有礼がナショナルな身体を生産するために全国に導入した運動会に着目している。また権[2006]は、戦後に創設された国民体育大会を、象徴としての天皇の存在を国民に広めるための手段として利用されていたことを明らかにしている。これらは主に、日本という国家に対する人々の恭順を引き出すための手段としてスポーツを扱っていると言えよう。

また、同じく(3) 国家主義としてナショナリズムを理解しているが、スポーツとナショナリズムは一見結びついているように見えて、実は無関係であると論じる研究もある。杉本[2003]は、W杯日韓大会における日本サポーターの熱狂的な応援は、一見スポーツとナショナリズム(国家主義)が結びついているように見えるが、実はそのナショナリズムは漂白されたものであり、あくまでファッションとして日の丸や君が代が消費されていたと過ぎないと論じる。

最後に、ナショナリズムという語に対して、これらの(1)～(3)のうちの複数の意味合いに着目した研究も存在する<sup>注6)</sup>。有元[2003]は、スポーツのナショナル・チームを報じるメディアが、身体に関する一定のステレオタイプを前提にしていると指摘する。つまり、「日本代表は組織力に優れる」といった言説は、個々の選手を詳細に評したのではなく、日本あるいは日本人の特徴として漠然と表象されているのである。そしてこうした言説は、暗に「日本人は身体能力に乏しい」という認識が前提とされている。このように同研究では、メディアが、国籍としての日本人に対して、エスニックな特色(組織力に優れる、身体能力に劣る)をもって表象している点を問題としている。この意味で、(1) 国民主義と(2) 民族主義の両者を含むような形で、メディアが前提とするナショナリズムを問題化する研究と言える。また佐々木[2015]は、1930年代以降に開発された集団体操の普及過程に着目した。

ラジオ体操に代表される当時の集団体操は、全国で一斉に実施されることから、人々に国民としての意識を涵養するという、(1) 国民主義的な特性を有していた。一方、こうした特性に着目した当時の政府は、愛国心の涵養など(3) 国家主義のために集団体操を利用しようとした。このように同研究が問題としたのは、(1)と(3)の接合(と失敗)の過程と言える。さらに坂上[2015]も、日本人の民族精神を体現するものとされた武道が、国家によって利用された過程を描いており、同研究も(1)と(3)の接合を描くものと言えよう。

以上、ネーションの語の多義性に起因する(1)～(3)について、スポーツとナショナリズムに関する先行研究を整理してきた。その結果、研究ごとに、ナショナリズムの語の意味合いが大きく隔たっていたことが分かった。そしてこのことが、日本におけるスポーツとナショナリズムに関する研究の理論的進展を妨げていたのではないか。すなわち、同じ「スポーツとナショナリズム」という看板を掲げた研究であっても、ある研究は(1) 国民主義という観点から論じ、ある研究は(2) 民族主義の観点から論じるといった具合に、その扱う主題が大きくずれていたために、相互を参照しながらスポーツとナショナリズムに関する議論が理論的に発展していかなかったと考えられる。

### 3.2 要請される場面による分類

次に、上記2.2の区分に沿って、ナショナリズムが要請される場面ごとに、スポーツとナショナリズムに関する先行研究を分類する。

そもそも、現在日本人と呼ばれる人間集団が、1つのネーションとなったのはいつ頃なのか。この点についても様々な議論があり、安易に断定することはできないが、多くの研究が指摘するのは日清・日露戦争の頃である[牧原,1998など]。この時期以降、ネーションのために命を投げ出すほどのナショナリズムを抱く人々が増えたとされるが、そうした意識を涵養するための制度として、学校制度や軍隊などが重要な役割を果たした。そして、学校制度の中で重要な役割を果たしたのが、各地で行われた運動会である。すでに述べたように吉見[1999a]は、明治期に森有礼によって創設された運動会というイベントが、ナショナ

ルな身体形成を意図していたこと、しかしそれはそうした国家側の意図通りに受容されたわけではなかったことを明らかにしている。

ネーションの創造とスポーツの関連について、日本の事例は上記の吉見[1999a]による運動会の事例程度しか見られないが、海外には多くの事例がある。例えば近年のカタルーニャによるスペインからの独立運動では、サッカーのFCバルセロナがその象徴となっている。また、アイリッシュ・スポーツ振興団体であるGAA (Gaelic Athletic Association) は、アイルランド独立のための思想的基盤となった[大沼,2003;海老島,2004;坂,2006など]。

以上のように、創造型ナショナリズムとスポーツについての研究は数が少ないが、再構築型ナショナリズムとの関連でスポーツに言及する研究は多く存在する。研究のアプローチの仕方で区分すると、歴史的アプローチから論究するものとして、権[2006]の国民体育大会研究、佐々木[2015]の体操研究、坂上[2015]の武道研究などを挙げることができる。また、フィールドワークによるアプローチの研究としては、杉本[2003]によるサッカーのサポーター研究、巴[2012]による在日中国人とサッカー研究、植田・松村[2013]による在日ブラジル人とフットサル場研究、清[2016]による在日朝鮮人・韓国人とサッカー研究、およびサッカーにおける排外主義的行動に関する研究などを挙げることができる。そして、スポーツとナショナリズムに関する言説からアプローチするものとしては、有元[2003]によるサッカーのサポーター研究や、浜田[2016]による1930年代のオリンピック関連メディア研究などを挙げることができる。

以上のように、その着目する時期によって先行研究を整理すると、その多くが再構築型ナショナリズムを問題にしてきた。このことは、今後、スポーツを通じて既存のナショナリズム研究を更新していくための重要なポイントとなり得る。すなわち、従来のメインストリームの社会学領域におけるナショナリズム研究では、ネーションの創造の場面に注目が集まっており、その再構築の場面はあまり注目されてこなかった。スポーツの事例は、そうした研究の手薄だった再構築型ナショナリズム研究に貢献できる可能性を有してい

ると言える<sup>注7)</sup>。

#### 4. スポーツを通じてナショナリズムを解明するために

日本におけるスポーツとナショナリズムに関する研究の視角は、以上のように整理することができる。それでは最後に、以上の議論、特に3.2の議論を踏まえ、スポーツという文化領域がメインストリームの社会学領域におけるナショナリズム研究に対してどのような面で貢献できるのかを考えていきたい。

すでに述べたように、スポーツの事例の多くはネーションの再構築の場面に着目していたが、こうした再構築型ナショナリズム研究は、メインストリームの社会学領域の研究の手薄な領域であった。ナショナリズム研究の第一人者であるSmith [2000] は、近年のナショナリズム研究は、ネーションを創造しようとする際のカリスマ的ナショナリストや、国家によるネーション動員のプロジェクトなどには大いに注目を払ってきたが、大衆の日常生活の中に見られるナショナリズムにはほとんど注目してこなかったと評する。そして、これからのナショナリズム研究は「『日常のナショナリズム』として知られるようになった事柄、つまり『普通の人々』が日常生活においてネーションという状態を生み出し再生産する多くのやり方」[Smith, 2000: 訳書165]について分析すべきとしている<sup>注8)</sup>。

こうした日常的な実践の中に見られるナショナリズムという主題について、近年の研究の準拠点となっているのが、Billig [1995]である。同研究が着目したのは、人々の日常生活の中にさりげなく存在し、ありふれた方法によって、人々のネーションらしさ(nationhood)を再生産させる言説である。これらを総称して、同研究は平凡なナショナリズム(banal nationalism)と呼ぶ。なお、ここで含意されるナショナリズムは、本研究の区分では(1) 国民主義の理解に立つものと見てよいだろう。具体的な分析対象となったのは、政治家のスピーチや、新聞記事などの言説である。すなわち、例えば政治家や新聞記事が「we」という表現を使う際には、それは特定の選挙区の間でも、世界中のすべての人間でもなく、ネーション全体を指すこ

とが暗黙の前提として共有されている。こうしたさりげない言説が再生産されることで、人々はネーションを1つのまとまりとして認識することが当然となる。こうした平凡なナショナリズムは、平時においては人々のナショナリズムを目立たぬように再生産するが、有事、例えば戦争などの際には、まるで電話のベルが突然鳴るように、熱狂的なナショナリズムのリマインダーとなる。有事にナショナリズムは見えやすくなるが、真に着目すべきは、平時に潜在化している平凡なナショナリズムのほうであるというのが、同研究の主張である。

Billig [1995] の重要な発見は、我彼を区別する日常的な言説によって、人々がナショナルな一体感を得ることを指摘していることである。すなわち人々は、日常的な言説を通じて、他のネーションとの間に「我々」「彼ら」の象徴的な境界線を引くことによって、自らの独自性を確認することができ、そのことがネーションとしての一体感を醸成するのである。そして同研究は、そうした作用がもっとも強く見られる領域としてスポーツを挙げている。同研究が分析対象としたイギリスの新聞は、保守的なものからリベラルなものまで様々な思想的立場を持っており、一般的に保守的なものほどナショナリスティックな言説を生産していた。だが唯一の例外がスポーツ欄で、スポーツ欄のみは、その思想的立場にかかわらず、いずれの新聞でも「ネーションの旗」を熱狂的にはためかせていた。スポーツ、特に国際スポーツイベントを報じる言説は、その読者に対して、平凡なナショナリズムを刷り込む強い作用があると考えられている。

それでは、なぜスポーツは人々に平凡なナショナリズムを強く刷り込むのか。それは、スポーツという文化領域では、本来曖昧であるはずのネーションに「実体」が与えられるからではないか。ネーションは、まさに「想像された共同体」として、人々の想像の中で構築されるものに過ぎず、本来は曖昧なものである。一方、スポーツの国際試合では、制度的にネーションの範囲を限定し、その集団同士での競争を前提としている。ネーションの代表であるナショナル・チーム同士のスポーツ競技の存在を自明視することは、本来曖昧なはずのネーションの境界を擬似

的に固定化することにつながる。すなわちスポーツは、どこまでが「我々」なのかを視覚的に提示することで、本来想像上の構築物に過ぎないはずのネーションに対して「実体」を与えるのである。もちろん、この「実体」も想像上の構築物に過ぎない。だが、スポーツという具体的な舞台でネーションが制度的に可視化されることにより、よりフィジカルな、確固とした集団としてネーションを想像させる作用が、スポーツにはあると考えられる。

また、一般的に想起されるスポーツのナショナル・チームとは、日本代表や韓国代表など、「国民」の意味合いを持ったネーションの広がり単位として結成されるチームである。しかし、より「民族」的な意味合いを持ったナショナル・チームも存在する。例えば、サッカー競技を世界的に統括しているFIFA (Fédération Internationale de Football Association) に未加盟の国や地域を統括するための組織として、ConIFA (Confederation of Independent Football Associations) という団体がある。ConIFAには、ケベック、ソマリランド、チベット、そして琉球や在日朝鮮人といった、「民族」的な意味合いの強いネーションを単位とした協会が所属している。このようにスポーツは、一般的にネーションとして承認されていない「民族」的集団に「実体」を与えることもある。

以上のようにスポーツという文化は、本来人々の想像の中で構築されるに過ぎないネーションに、擬似的な「実体」を与える。そのため、スポーツの範囲では、ネーションを実体的な存在としてみなすような言説が安定的・継続的に生産される。例えば「日本人はサッカー(スポーツ)を、どちらかといえばゲームとして捉えるが、韓国人はたたかいとして捉える。そこには民族的なメンタリティの違いがある」[ベースボール・マガジン社、2002:109]といった言説は、日本人と韓国人をそれぞれ一枚岩なものとして捉え、ネーションを「実体化」している典型的な言説である。このように、スポーツの報道の中では、ネーションを単位として「我々」と「他者」を線引きするような言説が多く見られる。こうした点にこそ、スポーツという文化領域を通じて、ナショナリズム理論を更新していくための突破口があるのではないかと。

## 5. 結語

本研究では、スポーツという文化領域を通じてナショナリズムという現象を解き明かすための手がかりを探るために、スポーツとナショナリズムに関する先行研究がナショナリズムをどのようなものとして捉えてきたのかを整理してきた。その結果、先行研究は国民主義、民族主義、国家主義といった様々な意味合いでナショナリズムの語を用いてきたがゆえに、相互参照の可能性が低く、スポーツとナショナリズムに関する理論的考察が深まっていかなかったと考えられた。一方、従来のメインストリームの社会学領域におけるナショナリズム研究があまり注目してこなかった、ネーションの再構築の場面に着目してきたという点には、今後のナショナリズム研究を進展させる可能性が見出せた。

以上のような動向を踏まえた上で、スポーツを通じてナショナリズム研究を進展させるために必要な視角は、スポーツの場面に見られる、人々をネーションの名のもとに一括りにしてしまうような言説に着目することだと考えられる。近年、Billig [1995] を筆頭に、日常生活の中で気付かないうちに刷り込まれるナショナルな言説に関する研究が注目を集めている。スポーツは、こうした主題に対して貢献が可能である。つまり、スポーツという文化領域の持つ重要な特徴は、本来曖昧な存在であるはずのネーション(「国民」的側面も「民族」的側面も含む)に対して、擬似的な「実体」を与えることにある。そこで、スポーツの国際試合の報道はどのように我彼を区別しているのか、あるいはその中に見られるネーション像とはどのようなものかといった点に、論究の余地が残されていると考えられる。

なお、イギリス圏では、こうした視角からの研究は盛んに行われている。例えば Vincent et al. [2010] は、2006年のサッカーワールドカップドイツ大会に参加したイングランド代表チームを報じる記事に着目した。そして、それらの記事の中から、イングランドのナショナル・アイデンティティを呼び起こすような言説を抽出している。日本を題材とした場合でも、例えば「日本人選手は組織力に優れる」といった言説や、



日本対韓国のライバル関係に関連した言説など、スポーツの国際試合を報じるメディアの言説分析から、スポーツとナショナリズムの結びつきを問うていくことは可能だろう。こうした視角の研究は、メインストリームの社会学領域のナショナリズム研究を更新していく可能性を有していると言える。

本研究の最後に繰り返し強調せねばならないが、本研究におけるナショナリズムの分類は、あくまで理念型に過ぎない上に、その境界は曖昧なものである。上記のナショナリズムの分類は、あくまでスポーツとナショナリズムに関する先行研究の視点を整理するための暫定的な「補助線」に過ぎない。当然この「補助線」は明確である方が望ましいが、すでに述べたように、それはきわめて困難な作業である。本研究では、ナショナリズムの分類をできる限り精緻にしようとすることに注力するよりも、曖昧であったとしてもある「補助線」を用意し、それをもって先行研究の着目してきたスポーツとナショナリズムの関係性を整理することを目指した。より有効な「補助線」を考案し、より深くスポーツとナショナリズムの関係性を分析することは、今後の重要な課題である。

## 注

- 1) 当該テーマに関する日本のスポーツ社会学領域における先駆的研究として、中村[1978]を挙げることができる。同研究は、近年ほどスポーツとナショナリズムの結びつきに対する注目が集まっていなかった時期に、ナショナリズムとインターナショナリズムの関係性や、ソ連のスポーツとナショナリズムの関係性など、画期的な主題を扱っていた。だが同研究におけるナショナリズム理解は、スポーツの場面に現れる国民性といった意味合いであり、本研究の意図するナショナリズム理解からは解離している。
- 2) 有元[2012]は、スポーツとナショナリズムの結びつきについて、2種の類型化を試みた。第1は構造的分析で、それを垂直のナショナリズム(競技スポーツにおけるナショナル・チームへの応援による自己同一化)と水平のナショナリズム(集団体操における一斉の身体動作による自己同一化)に分類した。第2は通時的分析で、冷戦期までは政治的理由が、それ以降は経済的理由が、それぞれスポーツとナショナリズムが結びつく主要因だったとした。こうした分類は本研究の関心に近いが、本研究はあくまでスポーツとナショナリズムの結びつきそのものではなく、この現象を取り扱った先行研究の分析視角を類型化しようとする点で、同研究とは視角が異なる。
- 3) 佐藤[2009:47]によると、nationはしばしば「国家」と訳されるが、nationとstateは明確に分けて把握することが必要である。nationが人間の集団を意味するのに対して、その運営を担う人間が入り替わっても存続していく脱人格化された制度としての国家は、stateの語が適切である。
- 4) この定義における「民族的」は、英語ではnationalに相当する部分であるが、すでに見てきたように、nationは簡単に「民族」と訳を当てることはできない。そのため、この部分を「民族的」と訳すことに対する批判もある[塩川, 2008:21]。
- 5) W杯日韓大会において、日本人サポーターたちが日の丸をフェイスペインティングするなどの様子を、香山[2002]が評した概念。なお、「ぶち」という表現から、レイズムなどにつながるのではなく、スポーツの範囲にとどまった穏健なナショナリズムという意味合いで解釈する研究も多いが、同研究の真意は、そうした「90分間のナショナリズム」がいつしかレイズムのような「がちナショナリズム」に結びつくことへの危惧である[香山, 2015]。
- 6) そもそも、ネーションは多様な概念であり、一面のみにこだわるのが極めて困難である。例えば、ある特定のナショナリズムに見える現象が、国家主義でもあり国民主義でもある、国民主義だが民族主義ではないが国家主義とも言えない、といった組み合わせが想定し得る[植村, 2015:12-13]。
- 7) 再構築型ナショナリズム研究の必要性を訴える吉野[2007]は、その具体的な題材として、若者に人気の音楽、創作和食業界、メディアに見ら

れる「外国人」の表象などと並び、スポーツのナショナル・チームへの応援を挙げている。

- 8) Smith [2000, 訳書166]も、「さりげなく掲げられた旗や、祝日の記念式典などよりはるかに盛り上がるナショナルなスポーツ大会は、諸個人を『自分たち』のナショナルな共同体に結びつけ、最大級の情熱を喚起する」と、まさに「日常のナショナルリズム」を喚起するものとしてのスポーツへの着目の必要性を訴えている。

### 引用文献

- 有元健, 2016, 「2002年W杯の遺産?:あるローカルクラブのファンにおけるナショナリズムの構築について」, 『日本スポーツ社会学会第25回大会大会プログラム・発表抄録集』, 44-45.
- 有元健, 2012, 「スポーツとナショナリズムの接合について」, 『現代スポーツ評論』27, 34-49.
- 有元健, 2003, 「サッカーと集合的アイデンティティの構築について」, 『スポーツ社会学研究』11, 33-45.
- 巴芳, 2012, 「在日中国人社会におけるネットワークとアイデンティティの変容」, 『日中社会学研究』20, 95-104.
- Bariner, A., 2015, “Assessing the sociology of sport: On national identity and nationalism”, *International Review for the Sociology of Sport*, 50(4-5), 375-379.
- ベースボール・マガジン社, 2002, 『週刊サッカーマガジン』877号, ベースボール・マガジン社.
- Billig, M., 1995, *Banal Nationalism*, Sage.
- 海老島均, 2004, 「スポーツ組織活動参与とナショナルリズムの生成過程」, 『スポーツ社会学研究』12, 61-70.
- 黄順姫編著, 2003, 『W杯サッカーの熱狂と遺産: 2002年日韓ワールドカップを巡って』, 世界思想社.
- Gellner, E., 1983, *Nations and Nationalism*, Oxford (加藤節監訳, 2000, 『民族とナショナリズム』, 岩波書店).
- 浜田幸絵, 2016, 『日本におけるメディア・オリンピックの誕生: ロサンゼルス・ベルリン・東京』, ミネルヴァ書房.
- 石坂祐司・小澤考人編著, 2015, 『オリンピックが生み出す愛国心: スポーツ・ナショナリズムへの視点』, かがわ出版.
- 権学俊, 2006, 『国民体育大会の研究: ナショナリズムとスポーツ・イベント』, 青木書店.
- 香山リカ, 2015, 「スポーツとナショナリズム」, 石坂祐司・小澤考人編著『オリンピックが生み出す愛国心: スポーツ・ナショナリズムへの視点』, かがわ出版, 18-42.
- 香山リカ, 2002, 『ぶちナショナリズム症候群: 若者たちのニッポン主義』, 中公新書ラクレ.
- 牧原憲夫, 1998, 『客分と国民のあいだ: 近代民衆の政治意識』, 吉川弘文館.
- 中村敏雄編著, 1978, 『スポーツナショナリズム』, 大修館書店.
- 大沼義彦, 2003, 「アイルランドにおけるスポーツの背景: エスニシティとナショナル・アイデンティティとの間」, 『北海道大学大学院教育学研究科紀要』89, 89-103.
- 小澤考人, 2015, 「はじめに: オリンピックの熱狂と「スポーツとナショナリズム」再考」, 石坂祐司・小澤考人編著『オリンピックが生み出す愛国心: スポーツ・ナショナリズムへの視点』, かがわ出版, 5-16.
- 坂なつこ, 2006, 「ナショナリズムとグローバリゼーション: アイルランドのスポーツを例に」, 『一橋大学スポーツ研究』25, 11-18.
- 坂上康博, 2015, 「日本の武道: ナショナリズムの軌跡」, 土佐昌樹編著『東アジアのスポーツ・ナショナリズム: 国家戦略と国際協調のはざままで』, ミネルヴァ書房, 75-110.
- 坂上康博, 1988, 『権力装置としてのスポーツ: 帝国日本の国家戦略』, 講談社選書メチエ.
- 佐藤成基, 2009, 「ナショナリズムの理論史」, 大澤真幸・姜尚中編著『ナショナリズム論・入門』, 有斐閣アルマ, 39-62.
- 佐藤成基, 2000, 「ナショナリズムのダイナミクス: ドイツと日本の「ネーション」概念の形成と変容をめぐって」, 『社会学評論』51(1), 37-53.

- 佐々木浩雄, 2015, 「体操とナショナリズム: 体操の国民的普及と国家政策化」, 石坂祐司・小澤考人編著『オリンピックが生み出す愛国心: スポーツ・ナショナリズムへの視点』, かがわ出版, 116-147.
- 清義明, 2016, 『サッカーと愛国』, イースト・プレス.
- 塩川伸明, 2008, 『民族とネーション: ナショナリズムという難問』, 岩波新書.
- Smith, A., D., 2000, *Nationalism: Theory, Ideology, History (2<sup>nd</sup> ed.)*, Polity Press (庄司信訳, 2018, 『ナショナリズムとは何か』, ちくま学芸文庫).
- 杉本厚夫, 2003, 「漂白されたナショナリズム: ジャパニーズ・フーリガンの誕生」, 黄順姫編著『W杯サッカーの熱狂と遺産: 2002年日韓ワールドカップを巡って』, 世界思想社, 66-82.
- 土佐昌樹, 2015, 「スポーツ・ナショナリズムと東アジアの発展」, 土佐昌樹編著『東アジアのスポーツ・ナショナリズム: 国家戦略と国際協調のはざままで』, ミネルヴァ書房, 1-24.
- 内海和雄, 2012, 『オリンピックと平和』, 不昧堂.
- 植田俊・松村和則, 2013, 「セーフティネット化する移民のスポーツ空間」, 『体育学研究』58(2), 445-461.
- 植村和秀, 2014, 『ナショナリズム入門』, 講談社現代新書.
- Vincent, J., E. (T.) M. Kian, P. M. Pedersen, A. Kuntz, and J. S. Hill, 2010, "England expects: English newspapers' narratives about the English football team in the 2006 World Cup", *International Review for the Sociology of Sport*, 45(2), 199-223.
- 吉見俊哉, 1999a, 「ネーションの儀礼としての運動会」, 吉見俊哉・白幡洋三郎・平田宗史・木村吉次・入江克己編著『運動会と日本近代』, 青弓社, 7-54.
- 吉見俊哉, 1999b, 「ナショナリズムとスポーツ」, 井上俊・亀山佳明編著『スポーツ文化を学ぶ人のために』, 世界思想社, 41-56.
- 吉野耕作, 2007, 「若者の「右傾化・保守化」とナショナリズム: 社会調査を通して大学生と共に考える」, 『年報社会学論集』20, 2-12.
- 吉野耕作, 1997, 『文化ナショナリズムの社会学: 現代日本のアイデンティティの行方』, 名古屋大学出版会.

#### 付記

本研究は、平成29年度奨励個人研究費による研究の一部である。